

島の歴史

ちやっけども島の勾玉でつけえ口マン

About Magatama



発見

丁字頭勾玉は、1976(昭和51)年に青苗遺跡の発掘調査で発見されました。遺跡の東側にある海岸段丘に石で囲われた墓が出土し、その副葬品として鉄剣・ガラス玉・水晶玉などとともに勾玉が発見されました。勾玉は被葬者のお墓にほうむられた人の胸のあたりに置かれていました。



Magatama (Comma-shaped beads)
ちやうじがしらまがたま
丁字頭勾玉

実物大
長さ5cm・厚さ2cm
重さ52.2g
奥尻島津波館で
常設展示されています。

Exhibited at Okushiri Tsunami-kan Museum

青苗遺跡は奥尻島で最大の遺跡で、縄文時代早期(約8000年前)から擦文時代後期(約10000年前)までの遺構・遺物が見つかっています。

鑑定

蛍光X線元素分析法により勾玉を鑑定した結果、糸魚川新潟県で産出される原石(ヒスイ)を用いていることが判明しました。

さらに、この勾玉を分析した木下尚子さん(熊本大学教授)は、弥生時代の西日本に由来する可能性のある一級品である、という考えを示しています。島の丁字頭勾玉は古墳時代(3~6世紀)に近畿地方で加工され、古墳時代後期(6世紀)以降に奥尻島にもたらされたと考えられます。

勾玉の研究者である大賀克彦さん(奈良女子大学特任講師)は、勾

玉と一緒に副葬されていたガラス玉や水晶玉などの分析から、勾玉自体は古墳時代前期(3世紀後半~4世紀前半頃)に造られたものの、島に埋葬された時期は8世紀代に下るだろうと述べています。これら玉類の入手先は近畿地方の都周辺に限られることから、7世紀後半以降におこなわれるようになったオホーツク文化人の朝貢や、727年に開始された渤海使の案内人として都へ赴いた人物のなかに島の住人が含まれていた可能性があると述べています。

勾玉の頭部にある二本の刻み文は丁字頭と呼ばれるもので、この文様を施された勾玉は北日本北海道・東北地方では奥尻島で見つかいていません(2013年3月現在)。大きさは北日本最大級で著名な考古学者・森浩一さんは五指に入る優品と評価しました。

糸魚川は、能登をふくむ越の国にあります。勾玉は能登臣馬身竜の故郷の特産物(シンボル)でもあった訳です。

奥尻島で見つかった丁字頭勾玉の持ち主は誰なのか。歴史への探求心を大いにくすぐられるミス터리です。手のひらにおさまる勾玉ですが、そこには奥尻島を結び目とした南北文化の壮大な交流をも想像することができます。

なぜ

全国多くは近畿地方で発見されている丁字頭勾玉の八割以上が、古墳の副葬品として出土しています。古墳は国家や地域を統率するレベルの権力者の墓です。丁字頭勾玉は政治的・軍事的・経済的なりダーが所有できる貴重な装身具だったはず。

ということでは、奥尻島で発見された丁字頭勾玉の所有者も、高い身分の人物だったと考えることができます。

ロマン

奥尻島に丁字頭勾玉がもたらされたと考えられる7世紀の中ごろには、大和朝廷の命を受けた征夷大将軍・阿倍比羅夫(あへひらの)らによる蝦夷地遠征があったとされています。日本書紀には芥明天

皇6年(西暦660年)に、大河のほとりて肅慎(あしはせ)と争いになったとあります。肅慎は本拠地である幣略弁嶋(へへのしま)に逃げますが、阿倍の軍団はそれを追いかけて肅慎との戦闘に勝利します。



ここで登場する肅慎は北方海洋民(オホーツク文化)の勢力である可能性が高いです。肅慎が逃げた幣略弁嶋は、日本書紀によると「渡嶋之別也(渡島の別なり)」と説明されており、これは渡島半島の近くにある別の島という意味にとれます。

奥尻島では同時代の遺跡からオホーツク文化の遺物が見つかっており、渡島半島の近くの島と言えば奥尻島がいちばん大きく目立ち

ます。奥尻島では同時代の遺跡からオホーツク文化の遺物が見つかっており、渡島半島の近くの島と言えば奥尻島がいちばん大きく目立ち



朝廷の文化圏で生きた人間であることを意味しています。また、島の勾玉の産地であると鑑定された



【イラスト】 木村哲朗

【奥尻島の遺跡年表】 Relics and Ruins

約8000年前 (縄文時代早期/青苗遺跡)
道具(網など)を使って魚や貝を捕り、石組炉と土器で加熱・煮る・茹でるして食べていた。貝殻で文様を描いた貝殻土器が多数出土。

約6000年前 (縄文時代前期/青苗遺跡)
地球が温暖化して島が広葉樹におおわれて緑豊かになり、ブナ・ミズナラ・クリ・トチノキなどの木の実(堅果類)が豊富になった。北海道式石冠(木の突をすり潰したり、円筒土器に貯蔵)をしていす。

約4500年前 (縄文時代中期/砥石遺跡)
地球寒冷化の影響で木の木の採取量が減り、魚貝中の食生活に戻る。豊かな海の幸を求めて、各地からさまざまな人たちが島を訪れるようになる。そのような移住者・交流者が共同で使った集団墓地が見つかっている。

約2200年前 (続縄文時代/青苗B遺跡)
人びとが海を利用して遠隔地と交易物々交換)をおこないはじめ。海獣や魚類の骨がたくさん出土し海産物を加工する作業場と、石器の素材となる石を取り出す作業場の遺跡が見つかった。海産物と石材は島の特産物(交易品)だったことが想像できる。

約1300年前 (縄文時代/青苗遺跡)
オホーツク文化期から、青苗遺跡(青苗砂丘遺跡)海を通じた交流が大幅に増えた時代。古代ヤマト文化につながる「丁字頭勾玉」が島の擦文文化・オホーツク文化の遺跡から見つかっている。

約10000年前 (擦文時代/青苗遺跡)
本州の人びとに干しアブリとアンカの毛皮を渡し、小刀や鉄鍋などの鉄器と交換するしていたと考えられる。島には鉄を精錬する技術が伝わり、銅(はがね)の漁具を制作していた。

青苗周辺にある遺跡の位置は、フントバグ地図で確認いただけます。



【奥尻島の遺跡年表】 Relics and Ruins

約8000年前 (縄文時代早期/青苗遺跡)
道具(網など)を使って魚や貝を捕り、石組炉と土器で加熱・煮る・茹でるして食べていた。貝殻で文様を描いた貝殻土器が多数出土。

約6000年前 (縄文時代前期/青苗遺跡)
地球が温暖化して島が広葉樹におおわれて緑豊かになり、ブナ・ミズナラ・クリ・トチノキなどの木の実(堅果類)が豊富になった。北海道式石冠(木の突をすり潰したり、円筒土器に貯蔵)をしていす。

約4500年前 (縄文時代中期/砥石遺跡)
地球寒冷化の影響で木の木の採取量が減り、魚貝中の食生活に戻る。豊かな海の幸を求めて、各地からさまざまな人たちが島を訪れるようになる。そのような移住者・交流者が共同で使った集団墓地が見つかっている。

約2200年前 (続縄文時代/青苗B遺跡)
人びとが海を利用して遠隔地と交易物々交換)をおこないはじめ。海獣や魚類の骨がたくさん出土し海産物を加工する作業場と、石器の素材となる石を取り出す作業場の遺跡が見つかった。海産物と石材は島の特産物(交易品)だったことが想像できる。

約1300年前 (縄文時代/青苗遺跡)
オホーツク文化期から、青苗遺跡(青苗砂丘遺跡)海を通じた交流が大幅に増えた時代。古代ヤマト文化につながる「丁字頭勾玉」が島の擦文文化・オホーツク文化の遺跡から見つかっている。

約10000年前 (擦文時代/青苗遺跡)
本州の人びとに干しアブリとアンカの毛皮を渡し、小刀や鉄鍋などの鉄器と交換するしていたと考えられる。島には鉄を精錬する技術が伝わり、銅(はがね)の漁具を制作していた。

青苗周辺にある遺跡の位置は、フントバグ地図で確認いただけます。

震災を語り継ぐ

The aftermath of the Hokkaido Nansai Oki Earthquake

1993(平成5)年7月12日午後10時17分、奥尻島に大きな被害をもたらした北海道南西沖地震が発生しました。マグニチュード7.8、推定震度6、津波は最大で30.6mの高さまで押し寄せました。奥尻島内だけでも死者172人・行方不明者26人に達する大惨事でした。

奥尻町では、島を襲った災害の「記憶」、さらには経験と反省から得た防災への「教訓」を、後生に語り継いでいく取り組みをしています。



地震によって倒壊した青苗岬灯台



震源地に向かって立つ慰霊碑「時空翔」



火災は半日以上続き街は焼け野原に

奥尻島津波館 Tsunami-kan (Okushiri Island Tsunami Museum)



- 開館時間 / 9:00~17:00
- 期間 / 4月下旬~10月31日まで
- 定休日: 月曜(祝日除く) 7・8月は無休
- 料金 / 大人520円・小中高生170円
- 団体(10名以上)大人470円 小中高生150円
- 電話 01397-3-1811

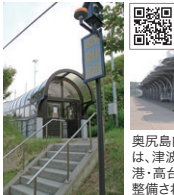
災害当時の写真、子どもたちの作文、災害の記録を伝えるドキュメンタリー映像、被災者198名を悼む「198のひかり」などを展示。奥尻島で震災を体験したスタッフのご案内します。島で発見された「丁字頭勾玉」の実物も展示しています。

防災フットパス Disaster prevention Footpath



島人で結成された「奥尻島津波語りべ隊」がガイドをおこないます。

- ガイド料金 / 1人500円~(10人以上)
- 所要時間 / 1~3時間(要予約)
- 問い合わせ / 観光協会



望海橋

奥尻島内でも被害の大きかった青苗地区には、津波避難施設「望海橋」・耐震岸壁の漁港・高台へすみやかに避難できる避難路が整備されています。



稲垣森太さん

島の学芸員

島の歴史体験

小さな離島に秘められた大きな歴史ロマンにもふれてください。



問い合わせは教育委員会(01397-2-3890)まで。



奥尻島元祖三平汁研究会
イメージキャラクター
さんべいさん



歴史を食べる

島の郷土料理「三平汁」

Regional cuisine "Sanpei Jiru"

奥尻島の郷土料理「三平汁」のルーツは、およそ千年前(擦文時代)までさかのぼれます。奥尻に流れ着いた武田信広(松前藩祖)に、島民の三平がご馳走したのが三平汁という伝承があります。三平汁は奥尻島が北方(アイヌの文化)と南方(和人の文化)の交わる場所であったことを伝える料理です。

歴史にふれる

稲穂ふれあい研修センター

Inaho-fureai-kenshu Center (History and Folklore Exhibition Room)



奥尻島の遺跡から発掘された土器や石器、動植物や鉱物などの標本、近現代の古民具などを展示。島の学芸員による「詳しくて・楽しくて・分かりやすい」解説付き。実際に土器・石器にふれることができるのも魅力のひとつ。入場無料。



【開館】9時30分~16時30分
【期間】5月~10月の木曜日・土曜日

北海道指定文化財「青苗遺跡出土品」から擦文時代の骨角器などを展示中。



歴史をつくる

勾玉づくり体験

Magatama Making

学芸員による「奥尻島の勾玉物語」を聞きながら、勾玉づくりを体験できます。お土産と土産話を一挙両得。体験時間90分。

【材料費】500円(観光協会・観光案内所で販売)
【開講日】木曜日・土曜日、その他予約で開講。
【受付】観光協会(01397-2-3456)

歴史をいもどく

ワラシャード21 (海洋研修センター)

Library

古代・近世・近現代の歴史、自然や動植物、さらに震災関連の資料など。奥尻島について書かれた書籍・資料を、自由に読むことができます。貸出不可。

【開館】9時~21時(土日は17時まで)
【休館】月曜日・年末年始



ふるさと奥尻通信

2005年創刊。島の知られざる歴史話や日常のなるほど話を掲載しています。



奥尻 21世紀 復興の森



花散策

ゆっくり歩いて1時間の森体験

新日本 歩き道 紀行 100選シリーズ

歩いてみたい100の道

島ではタヌキをよく見かけますが、キツネ・クマ・毒ヘビはいません。



Tanuki (Japanese Raccoon Dog)



復興の森

ツルが舞っている姿?



マイツルソウ (5月中～6月上旬)

カメのこうらのような葉っぱ



オオカメノキ (5月上旬)

ゆれた木をみつけたら見上げてみよう。森に穴があいているよ。



ログハウス

(4月下旬～5月中旬) コミヤマカタバミ



② ヤバビンクガがたつ白い花をつける



「しゅす」のように光沢がある葉 アケボノシュラン (8月下旬)

駐車スペース

炊事場

あまりはつきりしない道

作業小屋

※こちら側は沢になっているので入らないようにして下さい。

タヌキのためフンがよこみつかる

小さな白い花が集まっている



ツバメオモト (5月上旬)

うすむらさき色の花は、やがて赤い突となる



⑤ オニシモツケ (6月下旬～7月上旬)

ツルリンドウ (8月下旬～9月下旬)

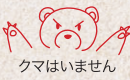


ブナの巨木 Bu-na (Japanese Beech)

危険植物 ツタウルシ

▲ ツタウルシ(3枚葉のツル植物)には触れないこと。かぶれます。

▲ ハチ(6月～)・アブ(7月末～8月中旬)の活動期にも注意。



クマはいません

ブナの新緑の中を歩こう。道の両側に生えている木は全部ブナ!?

⑥ ダイモンジソウ (8月下旬～9月中旬)

③ サンカヨウ (5月上旬)

木の葉のように大きな葉



エンレイソウ (4月中～5月上旬)

④ タニギキョウ (6月いっぱい)

車輪のような葉っぱ

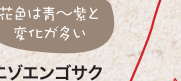


クルマバナソウ (5月中～6月中旬)

ギンリョウソウ(銀竜草) (6月上～7月中旬)

緑の葉を持たない不思議な植物。別名コウライタケ

花色は青～紫と変化が多い



エゾエンゴサク (4月中下旬)

赤むらさき色の花

⑦ アキノキリンソウ (8月下旬～9月下旬)

小さな黄色の花がまどまど咲く



早く花を見たい人はこちらから

① ナガハシスミレ (4月中下旬)

薬に歩きたい人はこちら回りがおすすめ



森と水の島

春は足もとから。木々はまだ葉を広げず、雪が去った地面に太陽の光が当たる早春。小さな植物が花を咲かせる季節です。5月末から初夏に向かって森の芽吹きは進み、まるで島全体がやわらかくふくらんでいくように、深緑が稜線を包みます。紅葉は10月。それも2週間ほどの出来事です。森は長い冬にそなえて葉を落とします。

そんな森の息吹を体感するなら、島北中部にある「奥尻21世紀 復興の森」の散策がおすすめです。

奥尻島の大部分は深い森に覆われ、ブナ・トチノキ・ヒメアオキなどの南方系の樹木が豊富にある一方で、山の奥にわけ入るとダケカンバのような北方系の樹木も見つかります。奥尻島は南と北の植生が共存する珍しい環境にあります。また、島の深い森は豊富な水を蓄える役目をしていて、島内の川はどれも小規模ですが水が溜れることはありません。

※地図と写真は高見愛子さんのご協力をいただきました。

イラストで紹介した①～⑦の花の写真は20ページに掲載しています。

【お願い】美しい森をいつまでも。植物の採集はご遠慮ください。